

## 30年後の植物科学、見えました

丸山 真一郎

東北大学大学院生命科学研究所

仙台駅東口のヨドバシカメラの前を歩いていた時のことでした。道端に「100円で10年後の未来を見ます」という看板を持った男が立っていました。私は、これはちょうどいいと思い、30年後の植物科学のことは見てくれないかと頼んでみると、男は「30年後を見るのは3倍疲れるから300円頂きます」と言うので、二つ返事でお金を渡しました。男は腕を組んでしばらくウンウン唸っていましたが、急に晴れやかな顔で「見えました」と言って未来を語り始めました。

「30年後の植物科学は、、、無いですね」「え？無い？」「そう、存在しません。植物科学という学問自体が廃れてしまったようです」「植物を専門にする学問分野がなくなってしまうということですか？」と私が尋ねると、男はきょとんとした顔で私を見返し、こう言いました。

「植物を専門にする学問など、必要あるのでしょうか？」

私はあまりの驚きに言葉を失いました。植物科学を専門とする研究者は今も大勢います。毎年開かれる植物学会には、専門家たちが植物ならではの話題を携えて数多く集まり、植物の話に文字通り花を咲かせているのです。それを必要ないなどと、どうしてこの、明らかに上下ユニクロで買った服を着た怪しい男に言われなければならないのか。私がまごついているうちにも、男はまくしたてます。「30年後には、植物科学や動物科学といった、いわば対象に主眼を置いた研究は廃れて、目的主導型の学問分野が乱立しています。今のVRを格段に進化させたような仮想現実装置を使えば、国内学会も移動なしで、国際学会だって同時通訳装置を使えば気軽に参加できます。研究者が、今知りたいと思うテーマ、明らかにしたいと思う謎について、目的を共有した人が集まって語り合う方が、ただ同じような材料を使っているというだけの人が集まるより、ずっと効率的です。あと、研究材料が植物だけという人はもうほとんどいませんね。大抵は、植物体内の全ての分子の流れとか、植物とその周辺環境や土壌の全生物だとか、植物と人間と文明を合わせた農業の仕組みそのものとかいったような、ある時空間に存在するシステムをありのままに描写し、そのままの形で非破壊的に分析する研究が主流です。」

私は、呆然としてその場に立ち尽くしました。男の見た目からは予想もしていなかった話の小難しさもさることながら、その内容に圧倒されてしまったのです。男は、もう私がこれ以上お金を支払う気がないのを見て取ると、露骨に別の客を探してキョロキョロ辺りを見回し始めています。私は簡単に礼を言い、とぼとぼとその場を去りました。「ありがとうございましたー」という男の抑揚のない返礼を背に受けながら、自然と足はスタバに向かいました。

長い列の最後尾でキャラメルモカフラペチーノを注文するために並びながら、考えました。植物科学の未来が無い、そんなこと、あってはならないことだ。その一方で、頭の片隅では男の言葉に思わず頷いてしまう自分がいるのを感じます。頭の中が千々に乱れて居ても立ってもいられなくなり、私は「はんずゃー！」と雄叫びを上げて列を離れて駆け出すと、そのまま東急ハンズに向かい、スケッチブックとペンを買いました。殴り書きで「30円で30年後の未来を見ます」と書き付けて、駅前の歩行者用デッキにすっと仁王立ちで陣取りました。そして、私の思い描く30年後の植物科学を語り尽くすべく、その時が来るのを今か今かと待ち続けました。